広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

伝統を自由に組み替え、新しい「白」を創造

岡部 俊郎（としお）　熊本／陶芸家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

熊本県選出の匠、陶芸家の岡部俊郎さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日　熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

天草陶石の文化をつないでいく

九州の南西部にぽっかりと浮かぶ天草諸島は、日本の陶磁器文化を支える天草陶石のふるさとだ。多くの窯元が点在し、焼き物が生まれる島として知られる天草において、「水の平（みずのだいら）焼き」は2番目に古い歴史を持つ。陶器と磁器の両方の魅力を合わせ持ち、5代目によって開発された神秘的な模様、赤海鼠釉（あかなまこゆう）をきっかけに一躍全国区となった。現在は7代目の岡部信行さんと8代目の祐一さんによって約250年続く伝統は守られるが、その流れを受けて、次男である俊郎さんが2013年に立ち上げたのが「器峰窯」だ。地元で採れる天草陶石の風合いを活かした器づくりを目指し、モダンな絵付けを担当する奥様と二人三脚で白磁の器を手がけている。

エリア・コンサルティング

窯名の「器峰」は造語。「水平を意味する〝水の平〟より、少し高いところにある〝峰〟を目指せるように」。そんなひそやかな想いを名前に込めた。今回のプロジェクトを振り返ってもらうと、開口一番、「緊張してプレゼンテーションは時間をオーバーしてしまった。普段からあまり早口でしゃべれなくて…」と照れ笑い。もともと口数は多い方ではない。それでも安堵（ど）の表情を浮かべ、とつとつと話す内容から、地元・天草への想いと作品への熱量をしっかり感じられた。「希少な天草陶石の産地だからこそできることがある。伝統を守りすぎると伝承になってしまうから、少しでも面白い方へ。僕の考える伝統は、時代の流れとともに進化していくもの」。静かにゆっくりと言葉を選んで話す岡部さんの人柄には、誠意と決意が表れている。岡部さんは自身のルーツである天草で、自分の手で、天草陶石の文化をつないでいきたいと奮闘している。

岡部さんの作業風景

岡部 俊郎
熊本／陶芸家

1974年水の平焼次男として熊本県天草市に生まれる。1996年有田窯業大学校卒業後、波佐見（長崎県）にて修業ののち帰郷。家業を手伝う傍ら磁器作品を制作し、公募展出品やイベント出展及び個展を開催する。2013年器峰窯を立ち上げる。約250年続く家業水の平焼が代々受け継いできた地元の特色を生かす器づくりの理念に則り、地元産の天草陶石を使い、伝統技法に時に遊び心を加えながら磁器の器を作る。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT

「お重」のように重なり合った思い

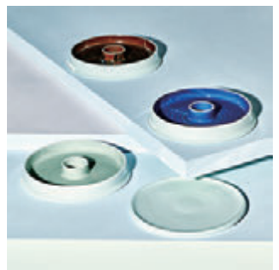
天草下島の西部には、「天草陶石」の鉱脈が3本走っている。採石場から切り出された陶石は、人の手と目で選別され、鉄を含む量に応じて等級が分かれる。海外にも輸出され、国内生産量の約8割を占める天草陶石。素朴な風情のもの、絵付けに適した青みがかったもの、ひときわ純度の高いもの。作り手たちによっていくつものバリエーションが引き出される天草の「白」は、世界に誇る宝物だ。

完成プロダクト「jeu（ジュウ）」

「器峰窯（きぼうがま）」の岡部さんが手がけた「jeu（ジュウ）」は、その高品質な天草陶石のみを使用したプロダクト。ひとつで台皿とどら鉢の2つの性格を持つ使い勝手の良い器となった。「地元の料理人から、ひとつの器をさまざまな料理に使い回すことができたらうれしいとリクエストされた。ふだん使用しない器の裏側に機能性を持たせたいと考えた」。

さらにユニークなのは、スタッキング（積み重ね）ができる点。エリア・コンサルティングの際、下川氏より「スタッキングができるように改良をして、〝お重〟のような使い方をしてはどうか」とアドバイスを受けたことから、ふたをつけ、重ねて使えるお重へと方向転換。さらに白色の素地に3色の釉薬をかける「かけ分け」により、器の表と裏の印象をがらりと変えて見せた。苦労したのはふた。焼きの作業でふたの裏側に棚板の表面がついてしまうのが悩みだったが、二重高台をつけることでこれを回避した。

「どら鉢の方は寿司を入れたり、オードブルを盛ったり。台皿の方も和食、洋食など何でも映えると思う。もちろん、ふた単体も。好きなように使ってほしい」と楽しそうに話す。なるほど。料理人の想像力も問われる器だ。というのも、このプロダクトのひらめき自体、料理人との何げない会話から生まれたものだから。つくる人も、使う人も、メード・イン天草であるということ。天草の人が天草陶石を使って作る白磁と、地元の食材を使う料理人がコラボレーションしてこそ、天草陶石の産地として「説得力のある器になる」と考える。「jeu（ジュウ）」は、手に持った時ずっしりと重い。その重さには、岡部さんの想いも込められている。


釉薬のかけ分けにより印象はガラリと変わる